様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５２８４１０３

研究課題名（和文）異文化間能力養成のための教材と評価基準の開発およびその有効性の検証

研究課題名（英文）Elaboration of the teaching materials and the criterions of evaluation for the development of intercultural competence and its validation

研究代表者
大木　充（Ohki, Mitsuru）

京都大学・人間・環境学研究科（研究院）・名誉教授

研究者番号：６０１２９９４７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,200,000円

研究成果の概要（和文）：国際競争だけでなく，国際協調も求められているグローバル化した社会では，言語を通じて「偏見をなくし，お互いに対する関心と寛容の精神を育む」異文化間教育が役立つものと思われる。そのために，本研究では，つぎの三つのことを行った。①「異文化教育」のための教材作成，②「異文化間能力」の評価基準の開発，③開発した教材と評価基準の有効性の検証。

研究成果の概要（英文）：In the globalized society, not only international competition, international cooperation is also sought. Through the language, "to eliminate the prejudice, foster the spirit of tolerance and interest in each other," intercultural education is likely to be useful. Therefore, in this study, we did the following three things: 1 Elaboration of the teaching materials for the development of intercultural competence; 2 Elaboration of the criterions of evaluation of intercultural competence; 3 Its validation.

研究分野：異文化間教育

キーワード：異文化間教育　異文化間能力　異文化間能力評価基準　異文化間教育のための教材　偏見　寛容

１．研究開始当初の背景

国際競争だけでなく，国際協調も求められているグローバル化した社会では，言語を通じて「偏見をなくし，お互いに対する関心と寛容の精神を育む」異文化間教育が役立つものと思われる。小学校から大学まで，「国際理解」という名の下に外国語教育がおこなわれているが，目的と到達目標が明確でないために，その意義，教材，教授法，評価法を巡って混乱がみられる。また，『ヨーロッパ言語共通参照枠』（CEFR）には，「コミュニケーション能力」に関する評価基準は数多く掲載されているが，「異文化間能力」に関する詳しい評価基準は示されていない。日本でも，特に英語のコミュニケーション能力に関する Can-do リストの開発は盛んであるが，異文化間能力に関する本格的な Can-do リストは開発されていない。『外国語学習のめやす 2012』（国際文化フォーラム）に簡単な基準が示されているのみである。

２．研究の目的

本研究事業の目的は，３つある。（１）異文化間教育のための教材の研究と開発；（２）異文化間能力に関する（自己）評価基準の研究と開発；（３）教材と（自己）評価基準の有効性の検証の検証。

３．研究の方法

（１）異文化間教育のための教材の研究と開発は，主に *Miroirs et fenêtres – Manuel de communication interculturelle*『鏡と窓−異文化間コミュニケーションの教科書』 (Martina Huber-Kriegler, Ildikó Lázár et John Strange, 2005, Conseil de l'Europe, décembre, 126p) を参考にして行った。この教科書には，つぎのような教材開発目的が記載されている：①文化的にきめられている自分自身の価値観，行動，考えかたについてよく考えさせる。②価値観，行動，考え方の異文化間差異を気づかせる。③言語使用の文化的に決められている側面について気づかせる。④観察，解釈，批判的思考スキルを実践させる。⑤多元的世界観を身につけさせる。⑥異文化とうまく折り合いをつけさせる。⑦他者に対して，偏見を持たず，共感，敬意を育む。

われわれもこの目的をできるだけ反映させて教材作成を行った。

（２）異文化間能力に関する（自己）評価基準の研究と開発は，Can-do リストに関しては，当初フランスのメーヌ大学の Michel Candelier を中心にして開発された CARAP (Cadres de Référence pour les approches Plurielles des Langues et des Cultures)「言語・文化への多元的アプローチのための参照枠」に準拠したものを作成する予定であったが，用いられている表現が抽象的で日本の学生には必ずしも容易に理解できないこと，また質問項目があまりにも多すぎて，手軽に授業で使用できないことが判明した。そこで，別の評価基準を探すことにした。しかし，異文化間教育の先進国であるヨーロッパで開発された Can-do 型の評価基準の大部分は，INCA (Intercultural Competence Assessment, Leonardo da Vinci European Training in the UK) の評価基準をはじめ，学習者が日常生活で母語以外の言語に接する機会があり，また身近に異文化が存在していることが前提になっていて，日本の学生の異文化間能力を測定するには適当ではなかった。最終的には，学習者がおかれている言語・文化環境に比較的依存していない Programme Pestalozzi の *Reconnaître la compétence interculturelle Comment savoir si je possède des compétences interculturelles ?*（Centre européen Wergeland Programme des Cités interculturelles）を日本の学生のおかれている環境にあうように改変して作成することにした。

（３）教材と（自己）評価基準の有効性の検証の検証に関しては，最終年度に，9 大学，合計 523 名の大学生に，Can-do 型の評価基準に基づいて試作した質問紙を用いて，彼らの異文化間能力を自己評価してもらった。

４．研究成果

（１）異文化間教育のための教材の研究と開発

分担者が，それぞれ，異なる種類の授業を想定して教材開発を行った。

① 大木充・西山教行・グラジアニ ジャン フランソワ

上記の 3 人の共著 『グラメール・アクティーブ −文法で複言語・複文化 −』（2012, 朝日出版社）で，「言語への目覚めクイズ」として掲載されていたものの一部を改変して，前述した *Miroirs et fenêtres* の教材開発目的をできるだけ反映するようにした。また，タイトルは，「Soyons plurilingues et pluriculturels!つながろう，世界中の人々と！」を「インターカルチャー入門　つながろう，世界中の人々と！」　に変えた。課題はクイズ形式で，全部で 19 ある。フランス語の文法，講読，会話等の授業に組み込んで用いることができる。

② 西村淳子

『異文化間能力を育てるグローバル市民入門』という小冊子（27ｐ．）を作成した。全体は，「１．私はどんなグローバル市民をめざすのか　２．外国語　３．異文化間能力　４．おわりに」の４章で構成されている。「３．異文化間能力」では，３つの savoir，「態度」（savoir-être），「技能」（savoir-faire），「知識」（savoirs）について，わかりやすく解説している。初めてフランス語を学習する学生を対象にして，最初の授業で，フランス語学習の意義を説明するときに用いることができる。

③ 姫田麻利子

国内外で異文化に遭遇したときに，どうように感じ，どのように行動するかを，学習者が関連する短い文章を読んで，自由記述するポ

ートフォリオ型の教材である。全体はA4，4枚で，課題２つなので，あまった授業時間に用いれば，その時間を有効に活用することができる。

④ 中村典子

フランスを含む複数の国で話されている言語，国の特徴，習慣，宗教を学習者自身が調べて，フランスだけでなく，日本についても客観的かつ相対的な見方をすることの重要性を理解する。全体はA4，6枚で，課題５つなので，③の教材と同じように，フランス語の文法，講読，会話等のあまった授業時間に用いることができる。

⑤ 倉舘健一

学習者のさまざまな内面を意識化するためのポートフォリオ型の教材である。５つのテーマ「１．言語学習への意識化；２．グローバル問題への意識化；３．ローカル社会でのグローバル状況の意識化；４．自分のなかの異文化の意識化；５．分からないものを分からないなりに捉える練習」があり，それぞれのテーマには，５つないし６つの課題がある。ひとつのテーマについて，すべての課題をするには，1コマ（90分）は，必要なので，特別の時間を設定する必要がある。

（２）異文化間能力に関する（自己）評価基準の研究と開発

Programme Pestalozziの質問紙を日本の環境にあうように改良した質問紙を作成した。質問紙は，異文化間能力を構成する３つのsavoir,「態度」（savoir-être），「技能」（savoir-faire），「知識」（savoirs）を計測するために，20の「態度」に関する質問，22の「技能」に関する質問，7つの「知識」に関する質問で構成されていて，合計49のCan-do型の質問を5段階評価するようになっている。そして，連携研究者の協力を得て，9大学，合計523名の大学生に，試作した質問紙を用いて，彼らの異文化間能力を自己評価してもらった。その結果，質問項目によってはアルファ係数（信頼性係数）が十分でなく，改良する必要があることが判明した。今後，アルファ係数を低くしている質問を削除することによって，実際に使用できる質問紙を完成することができるものと思われる。

また，異文化間能力の概念に関して，ヨーロッパとアメリカでは大きな違いがある。前者は主にByramの３つのsavoirに関するもので，後者は主にBennettの「異文化感受性発達」（主に異文化適応度）に関するもので，学生の海外研修や短期留学による異文化間能力の変化を計測するのに適している。そこで，山本志都・丹野大 の論文「「異文化感受性発達尺度（The Intercultural Development Inventory）」の日本人に対する適用性の検討：日本語版作成を視野に入れて」『青森公立大学紀要』第7巻・第2号, 24-42, 2002.）に掲載されているHammer & Bennett (1998)が開発したThe Intercultural Development Inventoryの日本語訳の一部に手を加えて，異文化適応度を計測する質問紙を試作した。しかし，オリジナルに手を加えた質問紙の利用も禁じられていることが判明したで，断念せざるを得なかった。

本事業で，開発した他の教材と質問紙については，版権の問題を精査してから，京都大学学術情報リポジトリに搭載する予定である。

（３）教材と（自己）評価基準の有効性の検証の検証

教材の有効性を計測するには，教材を使用する前の学習者の異文化間能力と使用後の異文化間能力を同じ評価基準を用いて計測する必要がある。しかし，本研究では，上記の評価基準（質問紙）の開発が遅れたために2回の計測は不可能であった。

他に，本事業では，国際研究集会を2回開催した。2014年4月5日，6日に京都大学で開催した国際研究集会「異文化間教育をめぐって」では，異文化間教育と異文化間能力の概念に関して，ヨーロッパとアメリカでは大きな違いがあることが明確になり，有意義であった。ヨーロッパ型の異文化間教育では人権が，アメリカ型のそれでは異文化適応力が重視されている。また，2016年3月29日の国際研究集会「異文化間教育の文脈化をめぐって」では，アメリカ型の異文化間教育は，文化の異なる者同士が「理解しえる」という前提に立っているのに対して，ヨーロッパ型では，そうでないことが明確になり有意義であった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　16　件）

① 西村淳子，グローバル市民育成のための異文化間コミュニケーション教育，武蔵大学人文学会雑誌，査読無，46巻1号，2014，1-29

② 西山教行，程 遠巍、中華世界における『ヨーロッパ言語共通参照枠』の受容：中国，台湾の教育文化と「スタンダード」，*Revue japonaise de didactique du français, Etudes didicatique*，査読有，8巻1号，2013, 32-48

③ 堀晋也，西山教行，ヨーロッパに多言語主義は浸透しているか：ユーロバロメーター2001, 2005, 2012 からの考察，*Revue japonaise de didactique du français, Etudes françaises et francophones*，査読有，8巻2号，2013, 33-50

④ Kazuhito Uni & NISHIYAMA Noriyuki，Is it possible to directly transfer concepts on evaluation in the CEFR to foreign language education in Japan?, *European Journal of Language Policy* (Liverpool University Press)，査読有，5巻2号，225-246

⑤ KIM Hyeon-Zoo・OHKI Mitsuru, L'environnement d'enseignement et d'apprentissage du français en Corée et au Japon & son impact sur la motivation chez les apprenants，Société Coréenne d'Enseignement de Langue et Littérature Françaises，査読有，47，2014，35-63
⑥ 大木　充・西山教行，グルーバル人材再考とフランス語教育―複言語・複文化教育の実践，第28回獨協大学フランス語教授法研究会報告，査読無，28，2015，20-22
⑦ NISHIYAMA Noriyuki，Indochine, Chine et Japon vus par l'Alliance française au XIXe siècle - la question de la diffusion du français sous son versant géopolitique，*Actes du premier colloque international conjoint de la SCELLF et de la SJDF*，査読有，2014，56-64
⑧ Mayo Oyama, Michel Candelier, & Noriyuki Nishiyama, Former les enseignants aux approches plurielles et au CARAP au Japon : Quelques résultats，*A diversidade linguistica nas praticas e discursos de educacao e formacao*，査読有，2014，343-358
⑨ 中村典子，フランスの小学校における「言語への目覚め」活動から「異文化間能力」を考える，甲南大学国際言語文化センター 『言語と文化』，査読無，19，2014，87-105
⑩ 倉舘健一，Global Skills :フランス語で "language arts" ?，第28回獨協大学フランス語教授法研究会 報告，査読無，28，2015，9 - 11
⑪ 大木充，西山教行，グローバル化する社会におけるフランス語教育の目的の明確化，第 29 回獨協大学フランス語教授法研究会報告，査読無，29，2016，47-49
⑫ ジャン＝フランソワ・グラジアニ，西山教行，フランスの大学における英語による教育をめぐる論争ー外国語による教育にはどのような法的規制が必要か，グローバル化と高等教育』未来共生リンディングス（大阪大学），査読無，8，2015，57-69
⑬ 西山教行，複言語・異文化間教育から考える「グローバル人材」のゆくえ，ヨーロッパ言語共通参照枠の現状と今後」ー 初修外国語を中心に（東北大学，査読無，2016，5-18
⑭ 中村典子，カナダのフランス語話者とアイデンティティ，甲南大学国際言語文化センター『言語と文化』，査読無，20，2016，39-61
⑮ 倉舘健一，市民性の学びの媒介とフランス語教育，RENCONTRES，査読無，2015，33-37
⑯大木充，姫田麻利子，倉舘健一，異文化間能力の評価をめぐって，言語教育エキスポ2016ー外国語学習に対する適切な動機づけを目指して，査読無，2016，76-79

〔学会発表〕（計　41　件）
① 大木　充，日本におけるグローバル人材育成と異文化間能力，多文化関係学会　関西・中部地区研究会（招待講演），2013 年 7 月 20 日，関西学院大学
② Mitsuru Ohki，Les objectifs de l'enseignement /apprentissage de la langue française à l'université，Colloque international Nouveaux enjeux du français（招待講演），2013 年 9 月 9 日，モンゴル国立大学
③ Hyeon-Zoo Kim et Mitsuru Ohki，L'environnement d'enseignement et d'apprentissage du français en Corée et au Japon，Colloque international conjoint SCELLF-SJDF 2013，2013 年 10 月 19 日，ソウル国立大学
④ 大木　充，英語教育と第２外国語教育の改革は可能か，複言語・複文化教育プロジェクト」シンポジウム（招待講演），2013 年 12 月 12 日，弘前大学
⑤ 大木　充，グローバル人材に必要な外国語力と日本語力，特別シンポジウム「グローバル人材と日本語」（招待講演），2014 年 1 月 25 日，京都大学
⑥ 姫田麻利子，大学生の「言語ポートレート」，言語教育エキスポ 2014，2014 年 3 月 9 日，早稲田大学
⑦ 倉舘健一，希望としての初修外国語教育とオルタナティブの可能性，日本フランス語教育学会，2013 年 6 月 1 日，国際基督教大学
⑧ Kenichi Kuradate, Takahiro Kunieda et Atsuko Koishi，Essais de communication intéractive dans l'Asie du Nord-Est pour l'apprentissage du français，Colloque international conjoint SCELLF-SJDF 2013，2013 年 10 月 19 日，ソウル国立大学
⑨ 中村典子，教材としての現代フランス映画（本編・予告編），甲南大学言語教授法・カリキュラム開発研究会，2013 年 12 月 7 日，甲南大学
⑩ 大木　充，異文化間教育の目的をめぐって-グローバル化と異文化間教育，京都大学国際研究集会 2014，2014 年 4 月 5 日，京都大学
⑪ HIMETA Mariko・OHKI Mitsuru，Les émissions d'apprentissage des langues et la représentation des langues au Japon，フランス国立東洋語学校 PLIDAM 主催国際学会，2014 年 6 月 11 日，フランス国立東洋語学校
⑫ OHKI Mitsuru，Dans quel objectif et pour quel domaine les étudiants japonais ont-ils besoin d'apprendre le français ?，国際フランス語教授連合アラブ世界委員会地域大会，2014 年 10 月 31 日，Hotel Laiko Hammamet （チュニジア）
⑬ 大木　充，欧州評議会の言語政策と複言語・複文化主義，南島文化研究所主催「南島研セミナー」（招待講演），2014 年 11 月 8 日，沖縄国際大学
⑭ 大木　充，京都大学の国際化と外国語教育，京都大学人間・環境学研究科学際教育研究部国際シンポジウム（招待講演），2014年11月24日，京都大学
⑮ 大木　充・西山教行，グルーバル人材再考とフランス語教育―複言語・複文化教育の実践，第 28 回獨協大学フランス語教授法研

究会，2014 年 12 月 7 日，獨協大学
⑯ 大木　充・西山教行，グローバル化した世界で日本の学生にはどのような目的でフランス語を教えるべきか教師は理解しているのだろうか，Rencontres Pédagogiques du Kansai 2015，2015年3月20日，アンスティチュ・フランセ関西－大阪
⑰ 大木　充，グローバル人材育成と外国語教育政策―批判するだけでなく提案をしよう，日本言語政策学会・特別シンポ（招待講演），2015 年 3 月 22 日，麗澤大学・東京教育センター
⑱ NISHIYAMA Noriyuki・Pierre Martinez，Géopolitique de l'Asie du Nord-Est et enjeux linguistiques : des idéologies partagées ?，フランス国立東洋語学校 PLIDAM 主催国際学会，2014 年 6 月 13 日，フランス国立東洋語学校
⑲ 西山教行，複言語主義に見る言語教育の目的，ヨーロッパ日本研究学会ヨーロッパ日本語教育シンポジウム（招待講演），2014 年 8 月 28 日，リュブリャナ大学（ スロヴェニア）
⑳ NISHIYAMA Noriyuki，La spécificité et les limites de la didactique des langues en français，国際フランス語教授連合アラブ世界委員会地域大会，2014 年 11 月 1 日，Hotel Laiko Hammamet （チュニジア）
㉑ 西山教行，ヨーロッパ言語共通参照枠』は到達目標のツールにすぎないのか，明治学院大学教養教育センター外国語教育研修会（招待講演），2015 年 2 月 25 日，明治学院大学
㉒ 西山教行，グローバル人材育成と外国語教育，慶應義塾大学「外国語教育による高大連携」研究グループシンポジウムPart 2（招待講演），2015年3月1日，慶應義塾大学
㉓ 中村典子，フランスの小学校における移民の子供たちへの「言語への目覚め」の授業を通して，2014 夏期公開研修会＆講演 「新しい言語教育観に向けて」，2014 年 9 月 14 日，信州大学
㉔ 倉舘健一，Par-dela la didactique : problématiques fondamentales du FLE dans le Japon d'aujourd'hui du point devue de la sociologie de l'éducation，日本フランス語教育学会，2014年5月23日，筑波大学
㉕ 倉舘健一，"Global skills" - Comment traiter en cours de francais "Language Arts" ?，第 28 回獨協大学フランス語教授法研究会，2014 年 12 月 7 日，獨協大学
㉖ 倉舘健一，市民性の学びの媒介とフランス語教育，Rencontres Pédagogiques du Kansai 2015，2015 年 3 月 21 日，アンスティチュ・フランセ関西－大阪
㉗ Mitsuru Ohki，L'apprentissage du français afin de construire l'identité sociale ou de devenir le soi ideal，Congrès international conjoint SJDF-SCELLF-APFT（国際学会），2015 年 11 月 21 日，西南学院大学（福岡市）
㉘ Shinya Hori, Mitsuru Ohki, Hyeon-Zoo Kim, Ming-Hua N. Tsai，Objectifs et usage de l'apprentissage du français pour les étudiants japonais, coréens, taiwanais，Congrès international conjoint SJDF-SCELLF-APFT（国際学会），2015 年 11 月 22 日，西南学院大学（福岡市）
㉙ Mitsuru Ohki，Etat des lieux de l'enseignement/apprentissage du français au Japon，Enseignement et apprentissage des langues étrangères（国際研究集会），2015 年 9 月 29 日，サウサンプトン大学（イギリス）
㉚ Mitsuru Ohki，Comment contextualiser l'enseignement du français et l'éducation interculturelle au Japon ?，Panel international 2015 Autour de l'éducation interculturelle（国際学会），2015 年 10 月 2 日，INALCO フランス国立東洋言語文化研究所
㉛ 大木充，異文化間能力の評価をめぐってーなぜ，誰の何を評価するのか，言語教育エキスポ 2016，2016 年 3 月 6 日，早稲田大学
㉜ 西山教行，日本人はなぜフランス語を学ぶかー歴史に見る学習動機と目的，全国語学教育学会京都支部（招待講演），2016 年 1 月 23 日，キャンパスプラザ京都
㉝ 西山教行，CAN-DOリストから複言語主義へ： ヨーロッパ言語教育政策の50年，東北大学2015年度高度教養教育開発推進事業・セミナー（招待講演），2016年3月4日，東北大学
㉞ 西山教行，フランスにおける成人移民への言語教育政策の変遷 －同化から統合，包摂へ，国際公開研究集会「移民と受け入れ社会のコミュニティ 創生―ひと・ しくみ・ことば」，2016年3月5日，東京工業大学
㉟ 西山教行，体験から考える異文化間性ーギニアから見たフランス語の世界，言語教育エキスポ2016，2016年3月6日，早稲田大学
㊱ Mariko Himeta，Témoigner de sa compétence en médiation interculturelle，Médiations interculturelles en didactique des langues et des cultures，2015年6月12日，INALCOフランス国立東洋言語文化研究所
㊲ 姫田麻利子，目標文化を観察する自分を観察すること，言語教育エキスポ2016，2016年3月6日，早稲田大学
㊳ Kenichi Kuradate, Takahiro Kunieda, Atsushi Nozawa，Programmation plurilinguale - comment élaborer des descripteurs afin de s’orienter vers un curriculum commun des langues ?，Congrès international conjoint SJDF-SCELLF-APFT（国際学会），2015年11月21日，西南学院大学（福岡市）
㊴ 倉舘健一，フランス語教育への社会学的視点がもたらすもの，言語文化教育研究学会，2015年06月21日，石川県政記念しいのき迎賓館（金沢市）
㊵ 倉舘健一，数値に頼らない評価活動の創出，言語教育エキスポ2016，2016年3月6日，早稲田大学

㊶ 倉舘健一，多言語と学びの環境デザイン，関西フランス語教育研究会，2016年3月25日，上田安子服飾専門学校（大阪市）

〔図書〕（計　3　件）
① 西山教行・平畑奈美編，くろしお出版，グローバル人材再考－言語と教育から日本の国際化を考える，2014，302
（大木　充，グローバル人材育成政策と大学人の良識，48-79；西山教行，私事化する教育と言語教育の可能性：グローバル人材に欠けるものは何か，233-255）
② 西山教行，細川英雄，大木充編，くろしお出版，異文化間教育とは何かーグローバル人材育成のために，2015，237
（西山教行，異文化間教育はどのように生まれたか，62-72；倉舘健一（訳を担当）複数文化と異文化間能力，73-91；姫田麻利子，間をみつける力－外国語教育と異文化間能力，118-140；大木充，異文化間教育と市民性教育・グローバル教育，142-154）
③ 西山教行・大木充編，明石書店，世界と日本の小学校の英語教育－早期外国語教育は必要か，2015，310
（西山教行，マリザ・カヴァリ，ヨーロッパにおける言語教育政策と早期言語教育，34-55；マリザ・カヴァリ，長野督，ヴァツレ・ダオスタの早期バイリンガル・複言語教育，56-75；大木充，アルジロ・ムチドウ，ギリシャにおける早期言語教育と「言語への目覚め活動」，76-101）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
大木 充（OHKI, Mitsuru）
京都大学・大学院人間・環境学研究科・名誉教授
研究者番号：６０１２９９４７

(2)研究分担者
西山 教行（NISHIYAMA, Noriyuki）
京都大学・大学院人間・環境学研究科・教授
研究者番号：３０３１３４９８

姫田 麻利子（HIMETA, Mariko）
大東文化大学・外国語学部・教授
研究者番号：５０３１８６９８

倉舘 健一（KURADATE, Kenichi）
慶應義塾大学・総合政策学部・講師
研究者番号：７０４０７１３８

西村 淳子（NISHIMURA, Jyunko）
武蔵大学・人文学部・教授
研究者番号：５０１９８５０３

長野 督（NAGANO, Kou）
北海道大学・大学院教育学研究院・教育学院教育学部・教授
研究者番号：３０３１２４０８

中村 典子（NAKAMURA, Noriko）
甲南大学・国際言語文化センター・教授
研究者番号：７０２９９０６４

(3)連携研究者
熊野 真紀子（KUMANO, Makiko）
弘前大学・人文社会学部・准教授
研究者番号：５０２１５０２６

米金　孝雄（YONEKANE, Takao）
駒沢女子大学・人文学部・教授
研究者番号：５０３２９１９０

竹中 のぞみ（TAKENAKA, Nozomi）
北海道大学・大学院国際メディア・観光学院・教授
研究者番号：２０２２７０４４

グラジアニ ジャン フランソワ(GRAZIANI, Jean-François)
大阪大学・大学院言語文化研究科・特任准教授
研究者番号：２０２２７０４４

木元 豊(KIMOTO,Yutaka)
武蔵大学・人文学部・教授
研究者番号：５０４５９９７１

平塚 徹(HIRATSUKA, Toru)
京都産業大学・大学院外国語学研究科・教授
研究者番号：７０２６８０９３